



## 第6回「午後のポエジア」より

タデウシュ・ルジェーヴィチ

## 生き残り

ぼくは二十四歳  
 屠殺場へ引かれて行き  
 生き残っていた。

ここに掲げる名は無意味な同義語だ——  
 人間と動物  
 愛と憎しみ  
 敵と友  
 闇と光

人間は動物なみに殺される  
 ぼくは見ていた——  
 屠殺された人間を積んだ荷馬車を  
 彼らは救済されることはない。

概念は単なる語にすぎない  
 美德と悪徳  
 真実と虚偽  
 美と醜  
 勇気と臆病

美德と悪徳は 重さが同じだ  
 ぼくは見て知っていた——  
 不品行で同時に徳の高かった  
 一人の人物を

ぼくは教師で師匠である人物を求める  
 その人がぼくに視力と聴力と言語を取り戻し  
 いま一度、事物と概念に名を与え  
 光を闇から切り離してくれるように、願う。

ぼくは二十四歳  
 屠殺場へ引かれて行き  
 生き残っていた。

詩集『不安』*Niepokój*(1947)より  
 栗原成郎訳

《解説》 タデウシュ・ルジェーヴィチ(1921–2014)はラドムスコ Radomsko(チェンストホヴァ北方の小さな町)に生まれました。第2次大戦中は「国民軍」のパルチザン兵士でした。その点ではアンジェイ・ワイド監督の映画『灰とダイヤモンド』の主人公マチェックと同世代の人です。この詩は1人称単数の詩的独白の形式をとっていて、「二十四歳のぼく」はナチス・ドイツ軍と地下組織で戦い、ナチスの降伏によって「生き残った」が、戦後のソ連型共産主義へ豹変したポーランド政府からは「ロンドン亡命政府」に協力した廉(かど)で政治的犯罪者扱いされて行き場を失った「死によって汚染された」若い世代を代表しています。この詩を収めた詩集『不安』によってルジェーヴィチは彗星のごとく戦後の詩壇に登場しました。現在も人気のある詩人です。

アウシュヴィッツ、マイダネック、トレ布林カをはじめ複数存在した強制収容所は、ポーランドでは「ヒトラー絶滅収容所」と名付けられているように「人間が動物なみに集団殺戮された」まさに「屠殺場」でした。ルジェーヴィチの兄はゲシュタポ(ナチの秘密警察)によって銃殺されました。パルチザン兵士のルジェーヴィチ自身は収容所の囚人ではありませんでしたが、約束されたソ連軍の援軍は来ず、武力に勝るドイツ軍との戦闘の場は抵抗不能の「屠殺場」にすぎませんでした。そして戦争直後のポーランド社会では、文化も、言語も、道徳も、宗教もすべての価値が崩壊しました。光と闇、人間と動物、愛と憎悪、美德と悪徳、真実と虚偽などのアンチテーゼが対立の意味を失い、同価値のものとなり下がった混沌が出現しました。

ルジェーヴィチは混沌からの世界の再創造を希求します。無から有を、闇から光を創造してくれる「教師」を探し求めています。それは人間を超えた存在であることを暗示しています。(栗原成郎)



ルジェーヴィチ(左)とギュンター・グラス(2006)  
 Photo: Michał Kobylński

## タデウシュ・ルジェーヴィチ

しゅうとめ  
 姑にささげる讃歌

乗原 成郎 訳

詩人たちは 乙女への恋歌を  
 インクの海を使い果たして書いたものだ。  
 ときにはガチョウのようだ、とうたい、  
 ときには春に生まれた仔牛のようだ、とうたって。

おのれ 己の妻と他人様の妻は ひ と きま みな  
 言葉の絹の綾織りにくるまれてうたわれた  
 しかしどんな歌人も 乙女の母親である人の  
しゅうとめ つまり 姑 の  
 誉め歌をうたった例はない。

それはぼくらに ぎょうせい 暁星を与えてくれた女だ  
 おお アポロの息子らよ  
 かの女はそれを目に入れても痛くないほど 可愛が  
 ってくれる。

かの女は僕らの くる 狂おしい愛の  
 果実を大切に育ててくれる  
 夜は 根気よく起きて  
 おむつを替え、おむつを替え、おむつを替える。

かの女は リンゴ入りの かも 鴨を焼き  
 ひき肉詰め こい の鯉料理を作り  
 下着を洗濯し  
 ソックスの破れを つくる 繕い  
 シャツにボタンを取り付ける  
 春になれば 家の塗装の傷みを点検し  
じゅうたん 絨毯をたたき マットレスに風を当てる  
 かの女の ひと 細々した家事は やればいろいろ きり 限が無い。

秋になれば ジャムを作り、キャベツを塩漬けにする  
 雪が降り 寒波で凍てついた空気がきしむ頃になると  
 孫のためにリンゴを たんす 箆筒の中に見つけてやる  
 ときおり恐ろしげで陰鬱な黒雲が  
 かの女 ひと の顔をよぎることがある  
 しかし澄み渡った空でさえ かの女 ひと の表情を曇らせ  
 ることがある

見ていたまえ かの女 ひと の白髪頭を  
 一本一本の髪の毛が 一日に ひとしずく 一滴の涙となる  
 それは しゅんじゅう 春秋を重ねる度ごとに。

かの女 ひと は用心深く気を配る  
 家のかまどの火が消えないように番をする  
 夜の亡霊どもを ほうき 箒で追い払う必要がある時は  
 かの女 ひと は家の目となり耳となる  
かふう おきて つと 家風の掟と務めの番人として立ち  
 まだ生まれてこない赤ん坊のためにおしめを作る  
 日常の実生活の使者である。

去勢された男どもの戯れ歌から  
 引用したあらゆるばかげたジョークに対して  
むこ 婿たちが 酒を飲む時にふざけて  
 言う冗談(「独り者を祝して乾杯」)に対して――

姑に謝罪せよ  
 家のかまどのそばに立ち  
 暖をとろうとして  
 火に手をかざす老女に赦しを乞え。

愚かな馬どもよ 地面に土下座せよ  
 かの尊敬すべき名の  
 響きに いなな 応じて 嘶け  
 そして人間の声で言うがよい  
 「かあさん おれたちの所へ来てください」と。

詩集『ほほえみ *Uśmiechy*』(1955)より

Tadeusz Rózewicz (1921–2014)  
<http://voiceseducation.org/content/tadeusz-r%C3%B3zewicz-polish>